

四、大信海

四不十四非

如来王本願に誓われたる、至心、信樂、欲生の三心をつぶさに論述して、ついに天親論主の「一心」に揚棄して、金剛の真心、即ち真実の信心を明暢されたる祖聖は、更にその大信心の内的風光を顕彰して、他力信心の絶対性を讃嘆せられるのである。

本節に説かれる処、世にいわゆる「四不十四非」とよばれるものである。まずその本文を挙げる。

「凡そ大信海を按ずれば、貴賤縊素を簡ばず。男女老少を謂はず。造罪の多少を問わず。修行の久近を論ぜず。

行に非ず、善に非ず、頓に非ず、漸に非ず。定に非ず、散に非ず、正觀に非ず、邪觀に非ず。有念に非ず、無念に非ず。尋常に非ず、臨終に非ず。多念に非ず、一念に非ず。

唯是れ不可思議、不可説、不可称の信樂なり。喩へば、阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如し。如来誓願の藥は、能く智愚の毒を滅するなり。」

以上の御文に於いて、不簡、不謂、不問、不論と、四回「不」の否定の文字が用いられ、「非」の文字が十四回使用されてあるが故に、四不十四非といわれるのである。不及び非の文字は、迷妄、誤謬を永遠に否定して、如来本願力成就の大信心を肯定せんとせられるのである。衆生の迷妄は永遠に否定さるべきである。この永遠の全的否定を通して如来清浄の大信海は打開されるのである。以下、順を追うて論述するであらう。

智愚の毒

この四不十四非を説き給う祖聖の真意は、大信心海の廣大にして唯一絶対なることを光闡せんとせられるのである。即ち四不十四非を説きたもうて後、その結文において、

「唯是れ、不可思議、不可説、不可称の信樂なり。喩えば阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如し。如来誓願の藥は能く智愚の毒を滅するなり。」

と論断したまわんが為である。阿伽陀藥とは、如何なる病をも全治して無病ならしめる「無病藥」とて、如来本願の絶対義を顕わさん為に、仮説せられたる喩である。まことに如来本願成就の名号はよく衆生一切の「智愚の毒」を滅する奇特最勝の薬である。

「智愚の毒」とは、智毒と愚毒とを合して「智愚の毒」と言われたのである。愚毒、誠に愚かなことはそれ自体毒である。自ら迷い、人を迷わす怖るべき毒である。しかるに愚のみならず、智をも毒と言われるのは何故であるか。衆生が発起する限り、智もまた毒である。我を根底とし、貪欲を生命として発起する衆生の智は、分別智とよばれ、智そのものが有漏煩惱智にすぎない。衆生の邪智、奸智が如何に人生を傷つけ

るか。衆生はこの分別智によつて生死海に流転するのである。故に智もまた、智毒と言われるのである。

而して如来金剛の本願力は、この智慧の毒の一切を滅して、不可思議、不可称、不可説の信樂を成就し廻向するのである。しからば、衆生の智慧の毒は如何にして滅せられるのであるか。衆生の思義（思い、はからい）、可称、可説、可説、全てこれ智慧の毒にすぎない。大信海はこの衆生の身口意の三業を不可思議、不可称、不可説と、全的に否定することによつて成就されるのである。

衆生の機類

「凡そ大信海を按ずれば、貴賤、縑素を簡ばず、男女、老少を謂はず」と。

これ衆生の一切の機類を挙げて、一切衆生の撰取さるべき、大信海の風光を示されたるものである。貴き人と、賤しき者、貴賤と云えば、一切人を尽くす一つの角度である。縑素とは、縑は黒、素は白、黒衣と白衣のことで、黒衣の人は僧であり、白衣の人は俗人である。僧俗と云えば、これ又一切衆生を残さず尽す一つの立場である。男女、老少又然り、男女は性別であり、老少は年齢の差である。貴賤を簡び、僧俗を差別し、男女、老少を謂うは、人生の相である。然るを、今これら一切を簡ばず、謂わずと説き、大信海においては一切衆生無差別平等なるを主張して、差別を簡び、機類を謂う所の衆生迷妄の分別智を否定せられるのである。

仏界に、貴を持ち込まんとすれば賤を排斥し、僧こそと主張する者は俗を卑しむ。古の高野、叡山は男を許して女を許さず。老若を主張する等、衆生の差別を主張する心、即ち仏の平等の大悲を無視する心である。

仏の大信海は、貴を入れしめず、賤を入れしめず、僧、俗、男、女、老、少等の一切を主張することを許されず、それら一切のすべてを否定せられるが故に、貴賤僧俗男女老少、全てを選ばずして撰取するのである。貴きは、貴きが故に救われるに非ず、卑しきは、卑しきが故に拒まれるのではない。僧侶と言ひ、俗人と言ひ。共に悉く唯一絶対の大成を領受して開かるる大信心によつてのみ、助けられるのである。

衆生の機相

衆生の機類は、全て救われるとしても、更に深くその精神界にわけ入つて、その機相について疑いを持つのである。それに対する大否定の文字が次の御文である。即ち、

「造罪の多少を問わず、修行の久近を論ぜず」と。

これ他力信心の絶対義を極論せられた文字である。歎異抄の第一章に云く、「弥陀の本願には、老少善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすと知るべし。その故は、罪悪深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なき故に、悪をおおるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なき故にと、云々。」この歎異抄の御文は、本願の絶対義を示せるものであるが、

「弥陀の本願には、老少、善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすと知るべし。」とは、衆生の機類機相を、老少善悪の四文字に代表せしめて、本願の大信心を高顕せられるのである。更に「その故は、罪悪深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。」と如来本願の内的秘密を示したまい、やがて、「しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なき故に、悪をも恐るべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故にと、云々。」

これ「造罪の多少を問わず」との御文と同一の世界を顕わされたものである。人間の善悪、人間を救わず、人間の善悪は因縁によつて生ずるが故に、随縁の雑善であり、雑悪である。縁に随うとは、因による業報が、具体的な世界を感じ、それに縁じて一切が生ずることである。されば、業風によつて生ずる波なるが故に、波は波によつて救われぬ。造罪の多少によつて救いに差異を生ずるのではない。ただ如来の本願によつて成立するのである。

しかし考えねばならぬことは、善悪により、造罪の多少によつて救われるのではない、ということをもしはき違えて、衆生の善悪の機に、没交渉に救いが成立するのだと考えてはならぬことである。一切を全否定する大鉄槌は、これを下すに、的がなくてはならぬ。衆生現実の機より外に、如来本願の鉄槌の下さるべき処はないのである。されば、多くの法体づのりの同行の如く「この機は見たと仰言る」とて、永久に如来の本願を漠然たる空気の中に躍らせて、かつて一度も、現実の機の上に本願を領受せざるが如きは、ついに聖人の大信心の聖域を信知することは出来ないであろう。

線香花火の如き雑善をたのみて高上りし、あるいは過去の罪悪を抱いて、いよいよ迷妄の谷底に沈まんとし、あるいは、十悪五逆の悪逆にして、しかもこれを知らざる等、眠れる衆生の上に、唯一絶対の權威をもつて君臨し、自力疑心の計度を全否定し、如来久遠の真実のみが無条件に肯定されてのみ、救いは成就するのである。その一念の相、即ち大信心である。かくの如き本願力に値わずして、善も欲しからず、悪もさまたげなし、造罪の多少を問わずと言わんか、真の暗夜に提燈の火を消すよりも、なお危険である。太陽によつてのみ電燈は無用となり、如来の大善大功德によつてのみ、衆生の善はその光を失う。「修行の久近を論ぜず」の一句、又、推して知るべし。三十年も聞法して何もものなき人あり、一ケ年にして、信心獲得の人がある。

非行非善

四不の説によつて、一切衆生は、機類機相の如何にかかわらず救済されることを示されたるに次いで、いわゆる十四非を説いて、他力信心の何ものたるかを示しつつ、衆生の機が持つ一切智愚の毒を滅せられるのである。そこに七対の世界が描かれてある。

其の第一「行に非ず、善に非ず。」との説である。

これは、信心の行者が、如来廻向の念仏行を、己が善根と誤るを否定せられ、念仏行の絶対義を顕示されるものであつて、聖人の一貫の主張である。歎異抄には之を詳述して、

「念仏は行者の為に、非行非善なり。わが計にて行ずるに非ざれば、非行という。わが計にてつくる善に非ざれば非善という。ひとえに他力にして、自力を離れたる故に、行者のためには非行非善なりと云々。」

念仏は、無漏の仏体が、名体不二の名号なつて、衆生を撰取不捨する処に成就するのである。されば念仏は絶対の大善であり、大行ではあるが、行者のはからいによつて成就する行に非ず、善に非ざるが故に、非行非善と云われるのである。

聖人すでに化土巻に、

「凡そ大小聖人、一切善人、本願の嘉号を以て、己が善根と為るが故に、信を生ずること能わず、仏智を了らず、彼の因を建立せることを了知すること能わざる故に、報土に入ること無きなり。」

と説破せられた。

本願の名号は己が善根ではない。しかるに小智に禍されて、仏智を了らず。本願の意味を了解することが出来ないが故に、信心成就せず、念仏を以つて己が善根するのである。法然門下のほとんども、師の如く念仏するも、非行非善の全的否定の智断を知らず、念仏の功を募つて、往生を成就しようとしたのである。聖人の信心正因の教化がそこに生まれたのである。

衆生の上に行善は成就されねばならない。衆生は全我を挙げて念仏行に生きねばならない。しかして、念仏行に生きれば生きるだけ、如来本願の成就を知らねばならない。

「念仏三昧というは、報仏弥陀の大悲の願行は、固より迷の衆生の心想の中に入りたまへり。知らずして、仏体より機法一体の南無阿弥陀仏の正覚に成じたまふことなりと、信知するなり。願行みな仏体より成ずる事なるが故に、拝む手、称ふる口、信ずる心、みな他力なりというなり。」(安心決定抄)

との如来本願の純粹行に生かされねばならない。念仏は行者のために非行非善である。

以上、十四非の最初、「非行非善」について頂戴した。南無阿弥陀仏は大善大行ではある。しかし念ずることによつて衆生の少しも加うべきなき、それ自体独立せる大善大行であるが故に、行者の為に非行非善であるというのがその骨子であった。

非頓非漸

次は「非頓非漸」の二非である。

頓とは、宗教的体験に於ける、時の極速を現わした言葉であり、漸とは、時を経て漸次に獲得し得るを現わした文字である。頓漸とは、主として、聖道諸宗の人が、修道の際における証悟の形式ではあるが、浄土教においても亦、重要な問題の一つである。我らの宗教的修行は、一念に頓に満足するのであるか。念仏修行の漸を追うて、やがて至り得るのであるか。これ即ち、前者はいわゆる横超他力と言われるもので、聖人が、

「夫れ真実の信樂を按ずるに、信樂に一念有り、一念とは、これ信樂開発の時剋の極促を顕し、廣大難思の慶心を彰すなり。」

と断定せられた他力信心の真面目である。しかして「漸」とは、横出他力、他力漸証、即ち自力念仏の、化土往生を指すのである。されば眞実信心は、一念に頓速至極に成就するのであるが故に、漸証排すべく、他力頓証重んずべきではある。

しかしながら、頓漸の形式に囚われて、漸を排し、頓を求めようとはからうことによつて、純粹他力の信を獲得せられるのではない。かかる形式に囚われて一念の頓速を、意識の上に空造せんとすれば、ますます深き迷路に陥るであろう。かつ又かかる失は、如来の智慧海を無視し、その本願を死物となし、あくまで機の相状を、重要動すべからざるものとなし、機を以つて如来を計らうものである。他力の信はあくまで衆生一切のはからいを超えたる、独立の名号の回向によつて成就するのである。故に「頓に非ず、漸に非ず・・・ただ是れ不可思議、不可説、不可称の信樂なり。」と説かれるゆえんである。これ衆生自力相對の頓漸二形式を払らつて、直ちに純粹無雜なる大信海に直入せしめ、他力絶対の頓証を獲得せしめんとせられるのである。

非定非散

次に出されたのは「定に非ず、散に非ず。」

定善とは、息慮凝心とて、慮を息め、心を凝らして、心内の動乱を静止せしめんとすることであり、一般仏教に於いては、最勝の善とせられる所である。散善とは、廃悪修善とて、身口二業において、善を實行して、その悪を廃止して信心成就しようとするのである。前者は、信心とは息慮凝心の定善成就を意味すると考え、後者は、念仏を廃悪修善の相對散善の性質のものと考えたのである。かかる衆生の定散二善に5囚わるる心を、定散自力と呼ばれる。まことに、信心成就すれば、心の波は、廻心懺悔、信心歡喜によつて、信前よりも平靜なるを得るかも知れない。觸光柔軟の願意もあることである。あるいは又念仏一行の執持はそこに、八万四千の行動に染み入つて、美しき散善を成就するであろう。

しかしながら、それ故に、定散二善の上に、信心成就の相を見んと欲するは、紅葉を秋と誤つて、青葉に氷を置かんとするの愚である。

信心は絶対である。第一義諦である。流転輪廻をひるがえして、生死解脱、仏果菩提の大道成就であり、久遠の大生命の覚証である。区々たる枝葉の問題ではない。直ちに、無量寿の根源に遡つて、道義の源泉に直參し、一念に尽未來際を解決する唯一絶対の問題である。されば、少善根に執着せる定散自力を、大行の鉄槌によつて紛粹せられて、直ちに如来の大信海に帰入せしめんとせられるのである。「定に非ず、散に非ず・・・ただこれ不可思議、不可説、不可称の信樂なり」である。誤つて本末を顛倒し、根本を忘れて、余徳を得んとしてはならない。末燈抄に曰く、

「先ず自力と申すことは、行者の各々の縁に随ひて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わが身をたのみ、わがはからの心を以て、身、口、意の乱心を繕い、めでとう為して、浄土へ往生せんと思ふを自力と申すなり。また他力と申すことは、弥陀如来の御誓のなかに選択攝取したまえる第十八の念仏往生の本願を信樂するを、他力と申すなり。」

我を以て如束をはからうべからず。如来を以て我を否定され、その智慧海に摂取すべきである。定散二善の成就が悪いのではなくて、定散二善に囚われ「我が身をたのみ、わがはからいの心」を主となし、直ちに、六字を徹信徹証することが出来ないのが悪いのである。問信の一念に六字に摂取さるべきである。

非正観非邪観

次は「正観に非ず、邪観に非ず。」である。

正観邪観ということは、観無量寿経に説かれてある所である。即ち、定善十三観を説ける中に、地想観、宝楼観、華座観、真身観、観音観、勢至観等に「是の観を作すをば名づけて正観と為し、若し他観するをば名づけて邪観と為す。」とあるがそれである。しかして正観とは「観、経と合するを正見と称し、名づけて正観と為す。」と釈せられる。即ち経に説けるが如く、浄土の莊嚴相を観ずれば正観であり、教に離れた邪なる観法を邪観と言われるのである。

聖道門、又は、自力念仏の人に於いては、この正観邪観ということが問題であろうが、絶対他力の世界に於いては、衆生定善の機になされる正観も、これを以て信心決定とするに足らず、邪観は猶更不可である。かかる観察は究竟的なものではない。正定業への助業である。かかる正観邪観、何れをも超えたる、不可称、不可説、不可思議の信心海こそ、第十八願絶対他力の世界である。衆生の正邪二観に囚われて、この大信心海を忘れてはならない。

非有念非無念

「有念に非ず、無念に非ず。」

有念とは、行者の心想の上に、明らかにたのむ思いがなくては助からないという主張、無念とは、如来の御はからいに任せてしまうから、こちらには何の思いもいらぬという説である。今頃でも「思えば自力、思わねば無念」といつたような事を言つて、いわゆる同行たちを困らせている教役者がある。聖人の御在世頃にも、この有念無念の問題がやかましかったようである。即ち末燈抄の最初に「有念無念の事」と題せられて、中に次の如く説かれてある。

「選積本願は、有念にあらず、無念にあらず、有念はすなわち色形を思うにつきていふことなり。無念といふは形を心にかげず、色を心に思わずして念も無きというなり。これみな聖道の教なり。……浄土宗にまた有念あり無念あり。有念は散善の義、無念は定善の義なり。」

とあり、これにも「選積本願は、有念にあらず、無念にあらず」と仰せられてある。信仰は、はつきりした意業の事実であり、やがて身口二業へ生きる生活そのものにはある。しかし、それであるが故に、明確にして正しい信相を意業の上に成就せんとはからい、あるいは他人に向つて、「心にはつきりと思ひ浮かべなくては助からない。」と主張するが如き、それがために、悪質の自力の計いに陥つて、容易に教えに信順せざるに至る。そこで反対に信心無念の主張をなし、あるいは信心をなげやりなものにせしむれば、あるいはより深き煩悶へと人を連れ込むであろう。

有念にもあらず、無念にもあらず、ただ如来本願のみ絶対であつて、信心海は、かかる有念無念を超えたる不可称、不可説、不可思議の信樂である。徹頭徹尾、如来中心の宗教であつて、狂える我を以つて如来を左右すべからず、如来真実の大鉄槌によつて、かかる相對差別のはからいを粉碎さるべきである。

非尋常非臨終

如来の大信海は、廣大にして絶対であり、一点の私心自力の混入することを許されない。もし微塵の不純分を混入せんか、必ずその毒素は、種々に醗酵して、やがて、胸中一杯に拡がり、全霊全身を左右して、ついに如来の本願より離れ、孤独抽象なる流転相をくりかえすに至るのである。

かくの如くにして一進一退、ついに仏凡一如一体の世界を知らず、道、成就せず、光、破闇せず、大悲徹到して志願を充すこと能わざるは、畢竟、教法の聞き方において欠くる処あるが為であるが、自証反省において不徹底であり、不了仏智の致すところである。如来の本願力は、衆生の自力疑心の上に絶対否定の大鉄槌を下して、一切のはからいを粉碎されるのである。聖人はすでに、この大信海の風光を現して、「行に非ず善に非ず、頓に非ず漸に非ず、定に非ず散に非ず、正觀に非ず邪觀に非ず、有念に非ず無念に非ず……」とお説きなされた。

次に示されたのが、「尋常に非ず、臨終に非ず。」との一對の否定の語である。仏道は、人生において成就される事実以上の事実である。大信心は、現実尋常平生の生活そのものの中に、流れくる生命そのものである。即ち、大法が絶対至上の権威と威力とを以つて、如実に必然に領解せられる聞其名号信心歡喜の端的に、一念の大信成就する時、正定聚不退の菩薩位に即得往生せしめられるのである。されば、信仰は明らかに平生尋常の事実である。しかるに聖人は何が故に「尋常に非ず」と仰せられるのであるか。

しかるに又我らは、美しき念仏行者が、よく一念仏相続して人生を一貫し、金色の雲、夕日に輝くが如き尊き臨終を迎える人あるを知る。まことに真実なるものは相續する、尋常平生の相、臨終まで貫くのではないか。しかるに聖人は「臨終に非ず」と払われる。何故であるのか。

我らはここにもまた、聖人の大信海の絶対の風光を拝するのである。けだし、尋常というも、臨終というも、相對なる衆生の上に開く信相成就の時機にすぎない。平生の時、信心決定する人もあり、臨終の砌に至つて善知識に会いて、念仏成就する人もあるであろう。

『浄土真要抄』にも曰く、

「親鸞聖人の一流においては平生業成の義にして臨終往生の望を本とせず、不来迎の談にして来迎の義を執せず、但し平生業成というは、平生に仏法にあう機にとりてのことなり。もし臨終に法にあわば、その機は臨終に往生すべし。平生をいわず、臨終をいわず、ただ信心を得る時、往生即ち定まるとなり」と。

救いは如来にあり

觀無量壽經の小品においては、一生造悪の逆悪が、その臨終に当って、善知識に会い、念仏申すことによつて救われることが説かれてある。これ全く如来大悲の人生における救いの極限を現わされたものである。臨終断末魔の切迫裏にも、なおかつ深き大悲の妙手が、その火炎の床に差し伸べられてなくて、どうして如来の大悲が普遍広大に得よう。如来の光は、何時、如何なる処にも徧照されてあらねばならない。

まことに如来広大の大悲本願は、臨終一念の苦患をも貫きたもうが故に、平生尋常の時、この広大なる本願の意を領解して、念仏行者たり得るのである。されば、平生業成の救いに徹して、臨終の如何をいわず、来迎を求めず、現前の一念に安住して報謝の不行に生かざるべきもの、真実の念仏行者である。されば、いたずららに来迎などに執着して、未だ自力の捨らざる者に対しては、「臨終に非ず・・・」と、その不了仏智を戒められるべきである。

しかれども、臨終と言ひ、平生と言う、共に衆生にあることであつて、如来にあることではない。南無阿彌陀仏の不行は、臨終でもなく、平生でもないが故に、臨終に至つてはからずも善知識に会い、平素の不了仏智自力疑心を打くだかれ、如来の大悲に撰取される者もあり得るが故に、平生業成に執われ、型となしてはからうものには、「尋常に非ず・・・」と否定されるべきである。であるから、『浄土真要抄』に「平生をいわず、臨終をいわず。」と言われるゆえんである。

南無阿彌陀仏に、臨終があるのではなく、平生があるのではない。一切の時を超越したる大悲なるが故に、臨終にもあれ、平生にもあれ、この六字の智慧光に触れて大信心成就する時、救われきるのである。であるから「ただ信心を得る時、往生即ち定まる」のである。

我々が、「尋常に非ず、臨終に非ず」と自力のはからいを超える時、そこには、唯一絶対なる大信心が開かれて来るのである。この大信心に生れ出でたる者は、平生に大信心決定するが故に、臨終正念、臨終来迎等を更にたのむことなく、臨終も亦、尋常となるであろう。

一念多念の諍

次に「多念に非ず、一念に非ず」と説かれる。

御消息集や、『一念多念証文』を頂戴する時、聖人御在世の頃、念仏門に於いて「一念」「多念」の諍いがあつたようである。入信の一念を重んずる者は、一念を重んじて多念相統を軽んじ、多念相統を救いの条件と考える者は、一念の主張を攻撃する。かくて一念派、多念派と別れて、人間の自力の計度を募つたのである。御消息にも、「京にも一念多念など申す争う事の多く候うようにあること、更々さふらふべからず。」と歎かれ、「一念多念の争いなんどのように詮なきこと論じごとをのみ申しあわれて候うぞかし、よくよく慎むべきことなり。」と諭されていられるのである。聖人は何時もこうしたことを悲しんでいられる。一念多念ということがないのではない、一念多念と乾からびた議論に如来を見失うことを悲しまれるのである。如来は生命であり、血であるが故に。されば『一念多念証文』には、

「一念多念の争いをなす人をば「異学別解のひと」と申すなり。異学というは、聖道外道におもむきて余行を修し、余仏を念ず、吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむものなり。これは外道なり。是等はひとえに自力をたのむものなり。別解は、念仏しながら他力をたのまぬなり、別というは、一なることを二つにわかちなすことばなり。解はさると云ふ、とくといふ詞なり。念仏をしながら自力にさとりなすなり。故に別解というなり」と。

一念多念の争いをなす者は、異学別解の人だと言われるのである。

非多念非一念

「多念に非ず、一念に非ず・・・。」

『一念多念証文』には「一念をひがごとと思うまじきこと。」「多念をひがごとと思うまじき事。」と挙げて丁寧の説かれてある。

即ち本願成就文には「聞其名号 信心歓喜 乃至一念・・・。」と一念を説かれ、本願文には「至心信樂 欲生我国 乃至十念・・・。」と誓われている。しかして一念を積して「一念というは信心を得る時のきわまりをあらわす語なり。」と仰せられる。我らが教主善知識の教えを通して、如来の大悲本願に徹して救われる信心の端的の相を一念と言われるのである。

しかし、それは一念信心成就して、一念の称名さえあれば、多念の称名はいらないという事ではない。何となれば「乃至一念」と乃至の誓がある故である。「乃至は、多きをも少きをも久しきをも近きをも前をも後をも、みなかねおさむる語なり。」と、聖人は釈せられる。されば「多念をひがごとと思うまじき事」と題して説かれるにあたって、

「本願の文に乃至十念と誓いたまへり。すでに十念と誓ひたまえるにて知るべし。一念に限らずと云うことを。いわんや乃至と誓いたまへり。称名の遍数定まらずということ。この誓願は即ち、易往易行のみちをあらはし、大慈大悲の極りなきことを示したまふなり。」

と仰せられた。一念の念仏は必ず多念に相続する。曇鸞大師も亦、如実の念仏修行の相は、相続するにあることを示された。しかし、それは、多念の念仏がなければたすからないというのではない。それは、多念を救いの条件にしたのである。一念も多念も救いの条件ではない。無条件に救われてゆく相である。だから「十念」の語の上に、「この誓願はすなはち、易往易行のみちをあらわし、大慈大悲の極りなきことを示したまうなり。」と、如来の大慈悲をこの多念の念仏の上に感謝されたのである。

されば『一念多念証文』を結ばれるに当って、

「また、阿弥陀経の、七日もしは一日、名号をとなうべしとなり。これは多念の証文なり。おもうようには申しあらわさねども、これにて一念多念のあらそいあるまじきことは、推し量らせたまうべし。浄土真宗のならいには、念仏往生と申すなり。またく一念往生、多念往生と申すことなし。これにて知らせたまうべし。南無阿弥陀仏。」

と教えたもうた。「多念に非ず、一念に非ず」ただ本願力によつて一念に救われて、多念に相続するのである。ここにもまた有難い大信海の絶対義を教えられた。かくて大信海は、「唯これ不可思議、不可説、不可称の信樂なり。喩へば阿伽陀葉の、能く一切の毒を滅するが如し。如来誓願の葉は、能く智愚の毒を滅するなり」と、凡夫の小賢しき智毒も、あさはかなる愚毒も、全て否定せられて、唯一絶対なる南無阿弥陀仏の大信海は示されたのである。